

池田源太著

『奈良・平安時代の文化と宗教』

戸田秀典

著者池田源太氏は、昭和六年に故西田直二郎先生の『日本文化史序説』が発刊されるに際し、関与せられて以来、西田文化史学を継承し発展させることを意図して来た学者の一人である。特に著者には、民俗学的な観点からこの問題を考究し、持前の英語の読解力を生かして世界的な視野から、日本史の始源としての口誦伝承を取扱った主著『伝承文化論攷』がある。

しかしそれと同時に、著者にとっては日本史の時代文化の把握も重要関心事であって、その時代的なフィールドは、著者の居所とも関連性があった。著者は大学卒業後の約十年間を平安の地に、そして昭和十六年以降は大和の香久山西麓に居を移しているが、著者は文化の理解のためには、まずその中に身を置くことが先決であるとすら考えられていたようである。従って当然、著者の研究対象は平安時代までであり、そのうち奈良時代を主とした大和に関する論考は『奈良文化選書』の五冊に収められており、また啓発的な『大和三山』や『大和文化財散歩』の著書があって、こうした大和についての代表的な研究業績により、昭和三十三年に

奈良県文化賞を受けられたほどである。一方、平安時代に関する執筆は、著者の研究生活の出発点に当る卒業論文に、「平安朝末期の宗教意識」を取上げているから、当初は平安時代の研究を目的としておられたようで、その後、昭和四十年頃から再びこの時代の論文が増加している。即ち著者の研究経歴は、最初の平安へ復帰しつつあると言えるかもしれない。

本書には専門機関誌等に寄稿されたる論文、十六編が収録されており、題して『奈良・平安時代の文化と宗教』という。各章がそれぞれ独立した論文であるから、一応、各章の要旨を紹介し、その後、いささか評者の感想を付加したいと思う。

序説

まず書目に見える文化と宗教との関係について、宗教は文化の一要因であるとする著者の広い文化史的立場を明らかにし、次に収録された十六の論文には、実は脈絡があるのだということを主張したものである。そのために問題の提起およびその解明と、歴史理解の便法としての時代設定との間に循環的相關関係の存することを述べ、かつ従来の奈良・平安両時代を一括して、これを和銅・養老以降、平安末期まで七つの時期に細分し、それぞれの文化の特殊性と連続性を説明している。いわば収録論文全体に対する総括的提言である。

第一章 和銅・養老期の性格

和銅・養老期は、平城遷都を実現し、やがて到来する天平正期への準備期として、一種の期待可能性を含んでいる。従って一方

で最初の文運の鬱興が見られるとともに、社会生活の面では貨食の安定をはかり、法治主義を採用して秩序を維持することが必要であった。即ち律令の上に立ち「礼」をもって政治に臨むというのが、元明・元正二女帝を擁した平城人士の基本姿勢であったという。

第二章 大安寺の道慈とその時代

本章は著者の奈良・平安時代を通じての七期区分説によれば、上記の和銅・養老期につぐ第二期の問題に属する。道慈は最も三論の教学に通じ、彼のわが国への三論将来は第三伝と称せられ、その宗旨は破邪顕正を義とする。道慈は自ら修造した大官大寺たる大安寺において、天平七年始めて護寺鎮国のために大般若経会を勧修した。その後、天平九年に至る三年間は疫癘特に猖獗を極め、藤原四家の長者が悉く病歿した程であって、全国的に疫災消除の諸経読誦が盛行されている。このことはやがて藤原広嗣の叛を契機として、聖武天皇の仏教への傾斜と平城を空都とする政治的迷走へ連なるのであるが、著者はこうした転換期における道慈の、道機と俗情を越えた三論の空の立場からの護国に対する指導的役割を重視し、この時期における諸経講讀による鎮災護国の流布は、道慈の思考形式に発するという見解さえ有している。

第三章 奈良・平安時代に於ける「煙霞」と「逍遙」の文化的立場

「煙霞」とか「風流」という概念は、奈良朝以前の「文史」的世界から発して、奈良末期・平安初期の詩文に特に好んで用いられた語であり、それは老荘の思想に基づいた仙家の風景を指し、その境中を徘徊することが「逍遙」であった。しかも『懷風藻』

と『凌雲集』あるいは『経国集』とを比較してみても、その同じ文化概念について、奈良朝より平安初期に一層徹底したものが認められる。この一見、茫漠とした中国的な思考形態および行動の類型を、当時の指紳が脱俗・自放を志向した時代文化の問題としてとらえんとする。

第四章 光仁・桓武朝の政治姿勢とその対仏情緒

光仁・桓武朝の約三十五年間の（著者の七期説の第三期に当る）政治の特徴は、全般的に緊縮政策を採用したことにある。とりわけ桓武朝の儉約の理由は「内事興作」（遷都）。外攘「夷狄」（征夷）。大事業を遂行したためであった。しかしてそのような緊縮政策の仏教への反映は、おのずから宗教生活に質実さを要求し、都市を出塵して山林仏教への変換を促した。天平盛期における大仏造願時の詔に「夫有天下之富者朕也」という発言があるのと相反して、この頃、秋篠寺へ食封を施入した時の勅（宝龜十一年六月戊戌）には「物天下物非二人用」という多衆参加の表現に変わっている。このことは問もなく「功德之道」が決して「因物多少」のものではなく、「信心為本」（大同元年六月辛亥の勅）という宗教本然の姿に帰して行くのであって、そこにこの時期の対仏姿勢が見られるとする。

第五章 文章経国

著者は桓武につづく平城天皇の大同から仁明の承和までの約四十年間を（著者の七期説の第四期）「文章経国」の時代と規定し、文章と政治との接近を説く。文章経国の語は魏の文帝の『典論』から藉り、『凌雲集』の序に明記されている。はやく「学令」にも「文藻」の語が見え、これに長ずる者を挙送するという人材採

用の条件とした。文章は文藻に通じ、学問としての文・理兼ね具えることを意味する。また文章の中では詩が大きな地歩を占めている。しかるに弘仁・天長の頃、殆んど詩を以て代表される観のある文章が、何故、経国的性格をもち得るのか。それは『詩経』の「王者は詩によって風俗を觀、政治の得失を知ることが出来る」という考えに基づくものであって、平安初期にも、これを受け継ぎ、詩をもって人心の発露と見做し、文章に政策樹立の基盤があるとしたのである。

第六章 石淵寺勤操と平安仏教

三論の本朝法脈からすれば三代道慈について六代目に当る勤操を中心に、旧仏教内部における抗争をここに取上げる。三論宗は元来、大安寺の門葉を主流としたが、平安時代に既に衰微を呈していた。延暦以来、三論の法敵は法相であり、前者が「立有破空」という立場をとるに對し、後者は「立有破空」という相反する宗義を有し、しかも当時、諸寺の学生で三論よりも法相に趣く者が多かった。このような苦境の中で、弘仁四年正月十四日、最勝王経の講が終わってから紫宸殿で諸宗高学の僧が集って論議を行なった際、座主になった勤操が法將の名にふさわしく、徹底的に法相を折伏して、三論のために万丈の氣を吐いたことがある。著者はこのほか勤操と空海との間に、虚空藏求聞持法の伝授を介して、師弟関係の存したことを明らかにし、更に勤操が住したという平城京石淵寺の位置を、東六条六里の辺に考定している。

第七章 嵯峨・淳和朝の対仏姿勢

本章は第五章の「文章経国」と同時期に相当するが、この論文の特異点は、追善・送葬行事の儉薄化的傾向の問題である。その

中心をなすのは大同元年六月辛亥（十九日）の制であって、頃年追福の風習が次第に派手になって来たことを戒め、誦經の布施を親王以下各位階に照して上限を定め、かつ一般に対しても中陰内の仏事を簡略化すべきことを定めている。また承和七年五月辛巳（六日）の淳和上皇の皇太子に対する願命の中に、追福の事は儉約すべし、山陵も築く必要はないといっている。即ち大化につぐ第二の薄葬令とも言い得るものである。著者はこうした薄葬思想の由来する根拠として、一は時代一般の儉約主義、二には物量よりも信心為本とする本然的宗教思想、三に老莊思想の影響を暗示している。たしかに上記の淳和上皇の願命の中で、冢墓を造らず碎骨して山中に散らすべしと言っているのは、仙境に逍遙する心位と共通のものがある。

第八章 平安初期に於ける神祇信仰の形態

まず光仁・桓武期における文化の転換を神祇信仰の面から把握しようとしている。その素材の一つとして皇極元年紀以来、国史に所見する祈雨神事を分析して三つの類型を措定する。その一は地方の俗信仰を母体としたもの、その二には仏教的要素と混合したもの、その三は天皇親祈の形式であって、これらの形式の中に古来の神祇信仰の祖型が窺われるとする。さらにその類型を前提として、光仁・桓武朝における丹生川上の神に対する祈雨を取上げ、それが第三の形式に属する素朴な信仰への復帰であると推定しながら、この期の丹生信仰が特定神への篤信現象として特色があると指摘している。しかるに次の仁明・文徳朝に入ると諸国の多数神に対し、品を定めて神々に位階を進めることが顕著になってくる。このように神階を設けた理由は、神々の応驗を考慮して

いるからであって、仏教の応報思想と通するものがあり、著者は仏教信仰の形態に誘発された印象があるという推定をくだしている。

第九章 「本文」を權威とする学問形態と有職故実

平安初期の文章経国の体制が崩れ、延喜・天曆頃（著者の七期説の第五期）から先例に依拠する新しい文化類型が発生する。先例に依拠する心位の基底には、律令制定以来の本文に權威を認めようとする学問形態が存した。特に延喜・天曆頃から知識人の才学として、中国の『爾雅』や『文選』などの本文を暗誦する風が盛んとなり、やがて中国文献に原拠を求めた『秘府略』や『倭名類聚鈔』なども編纂される。そうした本文至上主義が、単に一時的な文藝的傾向に留まるのではなく、本文が恒例的に政治を中心とした人間行為を規制するところの有職故実の存立がある。しかして有職の内容となるものは、法制の面では格・式のうち、特に永例となすにたる「式」や、これも中国に淵源する為政者の「起居注」や「実録」から、やがて「日記」が大きな比重をもつてくる。またそのような有職を支えている方法としては、その対象を暗練することが肝要であり、暗練という非創造的姿勢は、公的生活のマナー（儀礼）を漸次マンネリ化して行ったのである。

第十章 平安時代に於ける生活理念としての「風月」と「風流」
「風流」や「風月」は平安初期の経国的文章の中に共存・潜在していたが、中期に入って経国的思考が稀薄となるにつれ、個人生活の美学ともいふべきものに変質してくる。本来、「風流」や「風月」は、現実の利害得失に一種の抵抗を覚えて、自然の中

に離脱せんとする心から出発しているが、ここにおいてはずでに「庭前の風流」（『本朝文粹』）という語が示している如く、時・空的に制限された世界の中で表現されている生活の雅情として、特色づけられている。

第十一章 平安時代に於ける「文章」の経国的性格の変色

前章のあとを受けて、平安中期以降、文章と経国とが分離して来た傾向を、一層、徹底して考察したものである。天曆頃に活躍した菅原文時や源順の考えを引用すると、文章の経国的機能は次第に喪失して、詩文はわずかに「風月の興」に過ぎないものとなり、更に文時から次の世代へ移行すると、儒家たる大江匡衡は、明確に家業は儒学で、文章としての風月はその家業を資ける「余閑」的な比重しか有しないことを自称しており、また文時の弟子たる慶滋保胤に至っては、詩人としての風月は、もはや仏教の十悪中の妄語に該当するとさえ申し立てている。

第十二章 「藤原期」の時代設定

主たる史料として『大鏡』と『栄花物語』とを採用し、配するに『愚管抄』、『神皇正統記』を以てする。前二書は藤原道長の全盛期を起点とし、文徳朝あるいは醍醐朝以降を近代として設定している。藤原冬嗣が北家興隆の基礎を築いてから、良房・基経による摂関の地位の占有、他氏排斥の完了が実現して、文徳から村上までの間は、いわば藤原時代への導入期であり、冷泉より鳥羽までを藤原正期（著者の七期説の第六期）とする。就中、寛弘以後は譜代を優先とし、皇室の外戚たる地位を確保して、まさに藤氏の世は「落居」し、道長の全盛が到来する。そのことは同時に中世の皇統史観からすれば、「末世の道理」の支配する時期であ

ったのである。

第十三章 藤原文化に於ける私人的性格

この章も、ほぼ延喜を境にして文化の現象に転換のあることを、人間の公・私の生活姿勢の相違からとらえんとする。文学について、従来の公的儀礼に満ちた真名日記から、私人性が濃厚になってくる仮名日記への推移、「からうた」に代って個人的心境を表現した「やまとうた」の勃興、『源氏物語』の「雨夜の品定め」に見る緻密な人物描写、『大鏡』における本紀に対する列伝の別立など、総じてこれらは「おほやけ」に対する「わたくし」の生活意識の拡大を意味するものにほかならない。そうした私生活の伸張の由って来るところは、公的生活の拘束を脱して私的自由を求めんとした意欲に基づくものであり、また「今めかしい」文化を生み出さんとする創意的発想の成果でもあった。

第十四章 藤原文化に於ける宗教意識

宗教は『枕草紙』の理知性からは嫌悪感をもたれ、『源氏物語』の物のあわれとは拋物線を書く。所詮、出家の生活は藤原の栄華文化とは、本来的に相容れないものであった。貴族の宗教意識は道長の修善行事が代表する如く、数量にものをい寄せた「挑みわざ」であって、純粹な宗教的動機に発するものではなかった。

第十五章 藤原時代の「人間」と、文化の創造的要因としての

「心ばせ」

藤原時代の文学などに、「古代」的なものと「今めかしい」ものとを対立させているが、その「今めかしい」ものを創造する要因として「心ばせ」を考える。女性に必要なのは「かたち」（容貌）と「心ばせ」であり（『榮花物語』）、男性には秀才と「心ば

へ」が要求された（『大鏡』）。「心ばせ」とは心のはせ方であり、男性においては明確な思慮分別を指し、女性では特に豊かな情操を意味した。『源氏物語』をかりて総括的に「心ばせ」を表現すれば「大和魂」ということになり、それは藤原時代の日本の文化の創造源となったのである。

第十六章 平安末期に於ける「専らに心を至す」宗教生活の形態

『今昔物語集』と『靈異記』などを比較し、平安末期に（著者の七期説の第七期）、罪惡意識が深くなっていくに伴って、仏へ全託する宗教本然の姿に復帰して来たことを明らかにする。藤原盛期の「いとなみ」よりも、この時期には発心を根本とし、しかも同じ信心為本でも、それが平安初期の如く指導者の立場からの発言ではなく、民間に浸透した状態で把握されるところに、時代的意義があると説く。

以上の十六章を通読して来て明らかな如く、名は『奈良・平安時代の文化と宗教』と称するものの、アクセントは平安時代に存する。各章それぞれ別個の機会を得て執筆されたものだけに、用語にやや重複の感がないでもないが、それは同時に全章に亘って一本筋を通らせようとする著者の意図を示すものにほかならない。著者は平安前期の人文主義に最もウェイトを置き、それへの前提と、その後の変色を、文化発展のバックボーンとしているように思われる。かかる観点からすれば、最も精彩を放っているのは、何といっても第三・第五・第九・第十三・第十五の各章であろう。そのうち前三章に関して、同じ漢文学であっても中世の五山文学

の方は、禪宗教団の機構や禪僧の生活思想の推移と結びつけて、比較的研究が進められているのに対し、古代平安の漢詩文の興隆に関する研究は、極めて僅少であるといわざるを得ない。本書がこの問題を時代文化の組上に載せて考察を加えているのは、元来、脱俗的・自放的世界を研究対象として志向して来た著者の学風ともマッチして、本書が最も高く評価さるべき点であると思う。従って第二・第四・第六章の仏教に関する研究も、おのずから三論という特異なる教学に焦点が合わされ、その空観を文史的脱俗の境地という共通なる地盤から取扱っている。

平安時代の文化を大別して二期に分つとすれば、第十二章以下は後期の世界で、とりわけ力作は第十三・第十五章であろう。従来、平安前期の唐風文化から、後期の国風文化への転移が文化の現象面から把握されていても、その転換の原因となる温床が、今一つ明確にされていなかった。その点、両章で指摘している藤原時代における人間個性への関心とその伸張は、独自のものを生み出す要因、即ち硬直した中国的文化への固執を脱して、日本的なものを創造する有力な原動力になったと考えられる。

西田文化史学の時代文化に臨む態度は、時代人の生活のあらゆる分野から、その根底に横たわる心的傾向を帰納し、その独自の心的傾向の表出として時代文化を把握するにある。著者が本書の中で、しばしば文化の表象として「形態」の概念を用いているのは、同じ視点から歴史を考えようとするものであり、その具体的な一例を挙げれば、第十五章で藤原文化全般をとらえる要素として「心ばえ」を抽出しているのも、かかる姿勢を示すものにはかならない。そうはいうものの著者の時代文化を考察する研究

姿勢に関しては、その対象世界に限界があるとの批判を免れないであろう。その限界の一は生活の精神的領域に焦点が絞られていることであり、その二は問題を担当している人達の社会階層に限界があることである。後者に関して例えば、文藻をこととし得るものは特定階級のものであり、第十三章の私人的生活といっても、それは藤原氏を中心とする権門勢家の問題に過ぎない。このことはこの時代の史料に限界があるということを含めて、第一次的に文化荷担者が摺紳という特定階級に限られている時代の特殊性を考慮に入れなければならない。その上、著者が一般民衆の動静に對し全く無関心でないことは、第十六章の引用史料を見ると、『日本往生極楽記』などの往生伝を用いずに、『今昔物語集』の如き説話集を参照していることでも察せられる。これは前者が單に往生の「異相」を伝えるだけであるのに対して、後者には一般在家の宗教意識が、一層鮮明に記述されているからだと思う。

これを要するに本書が甚だ接近し難い平安前期の人文主義に照明を当て、それを中心として奈良・平安時代文化の特色を解明したことは、正しく労作の名に値するとともに、これらの時代の今後の研究に新機軸を開いたものと高く評価してよからう。

(A5判 本文四九八頁 索引二二頁)

一九七七年一〇月 永田文昌堂 七〇〇〇円)

(関西外国語大学国際文化研究所教授